7月度座談会

檀越某御返事

＊＊地区

背景と大意

- 弘安元年　57歳　　在・身延
- 対告衆　鎌倉の門下宛（不明）
- 大聖人の流罪が企てられる
- 難に会うことが境涯を開くと教示
- 現実社会での実践が仏法となる
- 現実を離れて仏法はない

さておわすること

御座（おわ）する ⇒ そのように、居られること

法華経を十二時に行ず ⇒ 法華経を昼夜に修業

現実社会で信心根本に生きる
そのまま妙法の修行となる

御みやづかい

宮仕えを
法華経と思え

職場での勝利が
境涯革命の修行

信心根本の行動は全てが
境涯革命の仏道修行となる

職場で勝利
社会で勝利

仏法正義の証明
我が境涯を拓け

一切世間の治世産業

天台の法華玄義の文

⇒ 仏法即社会・信心即生活

信心
即生活

現実生活を離れて
仏法勝利はない

仏法
即社会

社会の営みは妙法を
離れたものではない

在家と出家

出家
僧侶

俗世間を離れて出家
悟りを目指して修行

在家
大衆

現実生活で闘い
仏法即社会を実践

現実を離れて仏法は存在しない
我ら民衆こそ仏法の主役

指導から

- 仏法は「即社会」「即職場」「即地域」「即家庭」となる。「即」とは信心の一念
- 仕事こそ自身を鍛える修行の場である
- 日々、真剣に仕事を果たす事が、常に法華経の修行をしている事になる

現実社会こそ仏法勝負の舞台
日々の実践が現実変革の力